

リンクス大将の座右の銘は孫子の「彼を知り己を知れば百戦危うからず」である。産経新聞に書いてありましたが、あれども、要するにこれは洋の東西を問わない兵法の真理なわけです。栗林も八原も敵についても味方についても非常によく知る得る経験を持つていましたし、それからその知識を生かせる頭脳を持つていたと思います。

八原という人は戦後になって色々文章を書いていますが、頭のいい人だなと思わせるような文章です。

そういう彼らであるからこそあれだけの戦が出来た。しかし彼らの活躍というのはいまでもなく余りにも遅すぎた。知は力なりと言いますが、知識というものを力として活用しない、それどころか知っている者が排斥される風潮が、戦前、戦中の日本を支配していたのです。

アメリカの力の現実を知らずに、アメリカ力何するものぞというふうな勇ましい事を言う日本人が国を誤ったという事は否定できないと思います。

今後そういう失敗を繰り返さない為にも、知を力たらしめることがいかに大事であるか、それを日本文化の中に根付かせる努力をすることが、栗林中将の死を無駄にしない最大の所以であるというふうには、彼の生涯を振り返って私は考えておりますし、また栗林中将論を書いた最大の目的もそこにあります。

栗林中将の

奇跡的な統率

これから少し具体的に栗林中将の人となり、硫黄島戦から我々はどうな教訓を汲み取るべきなのかというふうな事について、私の思うところをお話していきたいと思えます。

硫黄島にアメリカ軍が上陸を開始する九カ月前、昭和十九年の六月に栗林中将は小笠原兵団長として硫黄島に着任します。その際まず兵団司令部の位置を決定するわけですが、その決定の仕方がいかにも栗林らしい。

当初、軍中央は司令部を小笠原諸島の父島に置くように提案します。父島というのは小笠原の政治経済の中心地であり、すでに父島要塞司令部も置かれていた。司令部活動に不可欠の通信の中核でもあったという事で、軍中央の提案はいわば常識的な提案だったわけですが、栗林中将は硫黄島に直接兵団司令部を置くという、それを退けました。アメリカは飛行場が欲しいんだから必ず硫黄島にやってくる。小笠原防衛の最前線である硫黄島に出なければ、本当の意味での指揮は出来ない、そういう覚悟で硫黄島に進出したわけであり、

生き残った部下の一人が、最初の中将の決断に彼の統率の性格が象徴的に現れていると書いています。どんな時

でも栗林中将という人は部下と苦楽を共にする指揮官で、のうのうと父島にいて硫黄島の戦闘を指揮するなどという事を、最初から考えなかった。いかに通信が発達したとはいえ、父島で考える硫黄島は、「群盲の象に触るに似ている」、やはり指揮官たる者は部下の目に触れる第一線で部下と共に行動してこそ本当に効果的な指揮も取れる、そういう判断で栗林中将は硫黄島進出決断したのだというのですが、その通りだと思えます。

栗林が部下と苦楽を共にする指揮官であつたということについては沢山の逸話が残されており、日本兵は千人ぐらい捕虜になつて生き残つていますが、その捕虜たちが皆口を揃えて栗林中将のことに感激を持って振り返っているのが驚いたと、敵の大將スミスが言っています。硫黄島というのは至る所硫黄が吹き出す地熱の非常に高い所で、そこに地下壕を掘つて日本兵は持久作戦を戦つたわけですが、地下を掘る苦勞というのは並大抵の事じゃなかった。そういうところで本当に鬼じゃなければ言えないような命令を下して、地下を掘らせたにもかかわらず、兵隊達は口を揃えて栗林中将を感激を持って振り返っている。この中将はどいう人間なんだというふうにはスミスは思ったということです。

そういう指揮官だったわけですから、彼の逸話についてはご存じの方も多いと

思いますけれども、やはり栗林中将という人の偉さを考えると省くわけにはいきませんので、簡単に代表的な例をいくつかご紹介したいと思います。

硫黄島というのは川が一本もありません。天然の水というのが全然無い。今でもそうです。何年前かに硫黄島に行きました時に、航空自衛隊の方が一緒に付いて来て下さったんですが、ペットボトルを持って来た。そして慰霊碑のところ、先ず最初に水を掛けます。水が無くてどれだけ苦勞したかということなんです。日本軍がやって来る前に、島民は千人程居た。その千人程しか居なかった時でも、水は大変な貴重品でしたが、そこに二万一千の日本軍がやって来たわけですから、水が足りる筈は無く、水不足には本当に苦しんだ。水が無い状態で地熱の高い地下を掘るわけですから、これはもう地獄の苦しみだったわけなんです。

そういうわけで硫黄島に内地から幕僚が連絡の為に来島することがあつたりすると、師団長への土産として一升瓶に詰めた内地の水を必ず持参したそうです。すると栗林中将は各部隊長を司令部に呼んで、たとえコップ一杯、つても皆に分配したといっています。そして彼は率先して節水に努め、これは有名な話ですけれども、毎日茶飲み茶碗一杯の水で髭を剃り、顔を洗い、残った水を手洗い用に使つたといっています。部下の参謀が書いていますけれども、

こういう鉄石の態度は兵団長独特のもので、誰も真似が出来なかつたそうす。ですからこの貴重な水を兵隊が無駄に使っている、栗林中将は顔を紅潮させて激怒したと言います。「水の一滴は血の一滴と心得ろ」という師団長命令を知らないか。お前が今使った水は、いざという時に何十人の命を助けると思うか」と言つて兵隊を叱責して厳しい処罰も辞さなかつた。

水だけじゃなくて食料不足も大変深刻で、生野菜なんかは全くありませんから、栄養失調患者が続出しております。栗林中将もやせ細つて、「インドのガンジーのようになりまし」と奥さんに手紙を書いていきます。ある時作戦打合せの為に大本営の陸軍部の少佐が茄子とか胡瓜とかを籠に入れてお土産に硫黄島にやつて来たことがあつた。そして栗林中将は、僅か一籠の茄子や胡瓜を副官に命じて何百もの小さなかけらに切り刻ませ、司令部の周辺に居合わせた兵隊達に一片づつ分けてやつた。「貴重な本土の生野菜だぞ」と言つて皆に分けてやつたというんですが、その一かけらも自らは口にしなかつた。とこの少佐は書いています。

もう一つ、栗林中将の統率を如実に物語るといいますか、そういう象徴的な事実があります。先程言いましたように生き残つた将兵一千人は、栗林中将を感激を持って振りかえるわけですが、皆口を揃えて言うのは「自分は戦場

で栗林中将に会つた、しかも一度だけじゃない、何回か会つて」と言っているというんです。しかも単に顔を見たというだけではなくて、「ご苦労」と声を掛けられたとか、射撃の指導を受けたとか、恩賜の煙草を貰つたとか、歩兵、砲兵、通信兵、海軍兵、その兵種を問わず皆そのように感激を持つて中將の面影を懐かしんでいるのです。

阿部という中隊長の文章が残っているのですが、この人もやつぱりそうで、阿部中隊長が陣地構築を作業していると部下が「年取つた将校さんがさつきからこつちを見ていますよ」と言うので振り返つて見ると、顔を見たことのある師団長その人だつた。驚いて作業を中止して笑顔でこちらを見ている栗林中将の所へ行つて、新しい陣地を構築作業中であると報告したそうす。その時のことについて阿部が書いている文章を読みます。栗林中将は私をタコの木(タコの木というのは硫黄島によく生えている亜熱帯の樹木です)の陰に誘つてまず煙草を差し出し火も付けてくれた。こんな経験は始めてである。大隊長までならいつも顔を合わせて何でも言えるが師団長ともなると顔を見ることが殆どない。それが親しげに煙草を出し火を付けてくれるなんて普通考えられないことである。作業ズボンは汗と土まみれで上半身は裸。そんな自分に師団長は「お前は中隊長がご苦労だな」と言われた。それから自

分が兵士達の健康状態、陣地の状況など詳しく説明した後、師団長は一つ一つの陣地を熱心に見て回られて指導された。その後いく度か私の陣地に足を止められ、煙草に不自由しているだろうと何本かいただいたことを思い出す。米軍が上陸した場合は本土からの救援が無く、玉砕戦闘となることを承知で硫黄島に最高責任者として着任され、深く部下に思いを致して炎天下陣地を回られた心情が痛いほど胸にこみ上げて来るのである。

これは例外的な証言ではなく、生き残つた将兵が口を揃えてそういうたぐいのことを言っているわけです。そういうことを考えますと、栗林中将は二万あまりの守備隊の将兵全員と一度ならず口をきいた可能性があることになり、彼が島にいた日数は二百日程度です。彼が単純な計算をすると五十三才の兵団長が一日平均二百人以上の部下に声を掛けていく計算になる。実際栗林という人は毎日朝早くからずっと島中を歩き回っていますね。島の地形とか陣地構築状況とか隅から隅まで毎日、毎日チェックして歩いている。だから硫黄島について栗林中将以上に知っている将校は誰もいなかったと言われる

ぐらいに丹念に見て回つてますから、その過程で彼は声を掛けると言うことをやつていたんだと思います。

こういう栗林中将の統率について、陸上自衛隊で大隊長の経験のある自衛官が書いている事ですが、自分の指揮官としての経験から判断して「奇跡」と言いたい程の強烈な統率だと言っています。

栗林という人が偉いと思うのは、こういう強烈な統率をする彼が、同時に非常に繊細な文人肌の将軍でありまして、愛妻家で子煩悩で実に家族思いのやさしい面を持つていた。また兵隊達と本当に全然変わらないような人間的な弱さというものを持つていて、それを自覚してそういうものと戦つていた人だということが調べていくとよく判るんです。

今日ここに持つてきたんですが、最近小学館から出た『玉砕総指揮官の絵手紙』という本です。アメリカ留学時代から硫黄島戦の頃まで栗林中将が家族にせつせと書き送つた手紙を集めたものです。これをお読みいただくと、単に豪気だけではない、中將の色々な側面がお判りになると思います。

帝国陸軍の致命的弱点

栗林中將の帝国陸軍の軍人としての特質について考えますと、彼は欧米列強のどこの国に行つても一流の軍人として立派に通用したであろうかと、今の

イチローとか松井みたいなもので、どこに行ってもちゃんとやれた人だなという感じがします。逆にやや極端に言いますと、そういう栗林中将の優れた特質を裏返しにすると、それがそのまま帝国陸軍の弱点になるといふふうな感じがします。次にその弱点についてお話をしたいと思います。

これでは負けたのもしかたがないなと思わせるような弱点であります。ただ誤解がないように前もって申し上げておきますが、敗戦後陸軍を悪しきまに言う傾向があつてそれは今も続いていると思ひますが、私は陸軍の弱点は陸軍に限ることではないし、海軍だつて同じだし、というよりも何よりも本質的に日本文化の弱点であつたといふふうには思っています。要するに陸軍だけを悪者にしてすまされるような、そういう簡単な問題じゃない、もつと深刻だといふふうには思っています。

ですからかつての失敗を繰り返さない為には、我々自身の弱点を妥協することなく直視する、つまり己を知ることなく何より大事だろうと思ひます。別に外国人に対して日本人の悪口を言うのではなく、日本人同士で己を知ろうの努力を真剣になすべきだろうといふことです。身内で遠慮をする必要はない。それにこのところ仲間褒めと言ひますか、日本人を美化する論調もいろいろ出ていますけれども、仲間内で褒め合つても仕方がないし、第一みつとも

ないと思ひます。仲間内はむしろ厳しくやるべきであります。

アメリカの凄さについてもお話ししたいと思ひますけれども、それは別にアメリカ礼賛のつもりではございません。ちよつと口はばつたい言い方かもしれませんが己の向上に繋がるし、他国についてはその長所を取り入れるべく努めることが、己の向上に繋がる所以だろつと思ひます。そういう意味でアメリカを知る努力というのは非常に大事なことだと思ひます。日本文化の弱点なんてことをいひますと、こいつも自虐史観の手合いかといふふうには誤解されることが多いものですから、まづ一言お断りします。

で、これから陸軍の弱点と私が思つている点について、大きいものを二つお話ししたいと思います。

主観的性格

一つは、その極めて主観的な性格であります。「主観的」というのは昭和天皇が陸軍大臣板垣征四郎大将を批判した言葉で、「陸軍にはすべてを主観的に見る伝統があるのではないか」と言つて、板垣大臣を叱責されたことがあつたといふのです。まさに帝国陸軍は、彼を知り己を知りの、彼を知るといふ重要な努力が極めて希薄で、日本的な主観に閉じこもつてしまひ、外の客観的現実を見ようとしなかつた。陸軍の戦

争指導が「盲目の戦争指導」などと言われる所以であります。それゆゑ、敵性語と言つて外国の言葉を学ばせない。外国の言葉を学ばないで外国の現実の何が判るかということになるわけですが、そういう愚劣なことをやつた。ただ、今いろいろ調べて驚いたのは、帝国陸軍に優秀な知米派がいなかつたわけではないといふことです。

いました。栗林中将以外にもいました。例えば東条首相と親友だつたらしいですが、渡久雄という人もそうです。何れも栗林中将の先輩でワシントンの日本大使館の武官をやつていた人達ですけれども、そういう渡とか寺本とかいふ優れた知米派がいて、アメリカの現実をちゃんと紹介する立派な業績も残しておられますし、それは公表もされていたのですが、それが全然と言つていほど活かされなかつた。

戦前、戦中に、これもやはりアメリカという国をよく知つていて、この国とだけは戦争をするなど言つて、文章を発表することを禁じられてしまつたりペナル派知識人で清沢淵という人がいますけれども、彼はその時の思いを日記に綴つています。それが戦後『暗黒日記』と題して岩波文庫から出ています。が、あれを見るとどういふふうにして口を封じられたのかといふことがよく判るわけです。清沢淵は「知らない者が知つている者を排斥する風潮」、そうい

う忌まわしい風潮が日本を覆つていたといふふうには言つています。

例えば『暗黒日記』にこんなことを書いています。昭和十八年五月二日付けですが、「敵国は日本の事情に通じる者をそれぞれに重要視している。例えばグルーを使つたことだ」と。グルーといふのは知日派のアメリカの外交官です。日本の大使として来たわけですが、日本はアメリカを知るものをさつぱり使わず、むしろ遠ざけしまつた。昭和十八年七月十四日付けの日記にはこう書いています。「物を知らぬ者が物を知つている者を嘲笑、軽視するところに必ず誤算が起きる。大東亜戦争前にその辺の専門家は相談されなかつたのみでなく、一切口を封じ込められた」。

文筆家や外交官に対してだけそういうことがあつたわけではなくて、陸軍内部の知米派に対してもその種の排斥がなされました。例えばインパール作戦に加わつてビルマで亡くなつた山内正文という中将がおられますが、この人はアメリカの陸大をトップで卒業したといふ大変優秀な知米派だつたわけですが、ところが知米派としての見識がなくて彼の身に仇をなした。秦邦彦氏が『昭和史の軍人達』という本に書いてあることですが、これも、こんなことを言つています。対米戦を軽々しく決めたのは陸軍内部に知米派が無かつたからだといふ向きがあるけれども、開戦前の陸軍人事をよく調べてみると、ま

ず知米派を要職から追い出す過程が先行している。

山内正文中将のことがそうで、彼は昭和十三年ワシントン大使館付き武官で赴任すると、アメリカの戦力を軽視するなどの警告をたびたび東京に送り、日独伊三国同盟を推進していた軍中央のタカ派に嫌われた。そうしてこれが傑作なんです、山内の「対米理解は国策に合わない」ということになって在任一年半で更迭されて、二度と中央の要職には戻れなかったというのです。誰その「対米理解は国策に合わない」という発想ですが、要するに客観的現実よりも主観的理解の方が大事だということなので、正に全てを主観的に見る伝統を持つ国ならではの言い草でありましょう。

栗林中将の場合も知米派としての見識が重用された形跡が殆どありません。アメリカから帰国後所謂省部の中核というところの指導的な立場に身を置いたことは一度もない。山内中将がワシントンからアメリカの戦力を軽視するなどという警告を発していた頃、昭和十三年ですが、栗林中将は何をやっていたかという馬政課長という軍馬を扱う箇所の責任者でした。彼はその時にある論文を書いています。「新馬政計画の樹立について」という論文ですが、冒頭「近代戦闘が科学一色に塗りつぶされ、軍機械化の風潮とうとうとして人皆飛行機を語り、戦車、自動車を論ずる

の際、ここに昔ながらの馬を談ずるは些か時世遅れの感なきをえないが」というふうにならず断つて、馬政計画について書いています。

彼はアメリカで近代戦闘について勉強してきたに違いないわけです。アメリカ中車で走り回っているし、テキサスの騎兵学校なんかに入っていますし、アメリカから戻って来る時にはヨーロッパをずーっと視察していますから、近代戦闘というものはどういふものか、第一次世界大戦の後どういふふうになったのかということについてよく知っていた筈なのです。ですから後に初代機甲部隊長に任じられますけれども、その彼が昭和十三年に馬政課長をやっていた。近代戦闘の本場アメリカで学んだ知識を生かす職場とは到底言い難いわけでありませぬ。

それだけではなくて、アメリカとの戦闘が始まってからも陸軍指導部は主観的性格を改めなかった。アメリカの客観的現実というのを本気で知ろうとはしなかった。沖繩戦の八原参謀について書いた本で、稲垣武氏が「信じられない話」だといって紹介しているエピソードがあります。陸軍大学の戦術教育は昭和十八年末まで対ソ戦一色張りで、戦術教育に使われる地図も満州の地図だった。それが対米戦術に転換したのは昭和十八年十一月三〇日、陸大五十七期生の卒業式に昭和天皇が臨まれた時、天覧の図上戦術が対ソ戦を

対象にしたものであることにびっくりされて、帰途侍従武官に「陸大はまだ対ソ戦をやっているのか」、「あれで大丈夫なのか」と言われたというのです。それがきっかけとなって陸大の戦術教育が変わった。しかし、昭和十八年末という戦争が始まって二年ぐらいたっているわけです。ミッドウェイでも負けていますし、ガダルカナルももう落ちています。山本五十六も死んでいる。アッツ島も玉砕している。つまり日米の好守逆転を示す兆候がすでにはつきりと現れている頃ですが、そういう時期になっても、天皇にこのようなことを言われなければ陸大は戦術教育を転換しようとしなかったということ。凄まじいというか、正に信じられないような話です。

もう一つ信じられない経験というのを書いているのが、山本七平で、彼も帝国陸軍の軍人だったわけですが、あるエピソードを紹介しています。

やはり昭和十八年の夏に山本は陸軍予備士官学校で幹部教育を受けていた。ある日、区隊長が教壇から改まった口調で言った。「本日より教育が変わる。対米戦闘が主体となる」。そして区隊長はその後いとも正直に付け加えたというのです。「新しい教育はア号教育と呼ばれるが、何をどう教えたらいのか実はさっぱり判らない」。正直は正直なんです、戦争を始めて二年近くもたつてようやく当の敵国を対象とする

戦術教育を開始することにしたものの、資料も何もないから何を教えてよいか判らないと、そんな阿呆な話というのは世界各国のどんな文献を調べても出てこない。一体どうしてこれほど現実性が無視できるんだ」と山本七平は書いています。

けれども、信じられない程の、阿呆なまでの現実無視、すなわち彼を知る努力を怠るリアリズムの欠如といえますか、そういうところに帝国陸軍だけが如実に示されていると私は思います。

栗林中将が硫黄島の北の端の「北の鼻」というところ（私も見てきましたけれども、本当に岩山が多くて断崖絶壁になっているようなところで、守るにやすく、攻めるに難いところに最後の拠点を作って米軍を待ち受けることを栗林中将がやったわけですが）、その北の鼻という最後の拠点に追い詰められた頃、昭和二十年の三月七日、栗林中将は大本営の参謀次長に最後の戦訓といわれるものを打電しています。因みに私は自衛隊の友人に、栗林中将の戦訓はどれくらい残っているんだらうか、防大とか防衛研究所とかにないんだらうかと訊いたら、無いでしようねと言われました。幾つか公表されている、或は活字になつている栗林の戦訓はあるのですが、本当に残っていないですね。しかし、残っているのを見るとやはりこの人の個性がよく現れていて面白い。

三月七日の最後の戦訓の中にこういう言葉があります。

「防衛上更に致命的ナリシハ彼我物量ノ差、懸絶シアリシ事ニシテ結局戦術モ対策モ施ス余地ナカリシコトナリ。そういう悲痛な文言が含まれている戦訓ですが、その二日前にも栗林は戦訓を打電しておりまして、やはりアメリカの物量と合理的戦法の凄まじさの前になす術を失った苦衷を訴えております。「本島防衛ニ當タリ致命的打撃ヲ蒙リシハ、海空ヨリノ攻撃ニシテ拳大ノ本島ニ對シ戦艦二、重巡五、輕巡一〇、驅逐艦約四〇、計約六〇隻、四〇〇餘門ヲ以テスル砲撃ノイカニ熾烈ナルカハ想像ニ餘リアリ」とはじまる文です。

皆さんの場合には私なんかよりもプロですから説明の必要はないのでしようが、学生にこういうのを読む時に、重巡て何だ、輕巡て何だ、驅逐艦て何だといちいち説明しなければいけないわけです。ここは経済界の方が多いのでしようからぜひ申し上げたいのですが、ワープロで軍事関係の言葉って本当に出てこないですね。何が出てくるかという金儲けのことばかり。要するに商売、経済そればかりなんです。これも象徴的な事実だろうと思います。先程今の若い連中が硫黄島戦も何も知らないといいましたが、それは何かこういうふうな事と根底で結びついている現象なのではなからうか、軍事アレギーというのは未だに解けてないで

すね。そういうことを色々考えさせられる現象なんです。ともかくこういう想像に余りある熾烈なる攻撃の状況を報告しています。続けて読みます。

「コトニ觀測機ノ機敏的確ナル誘導ニヨリ、要部、要點ニ猛射ヲ加ヘ、夜間ニ及ブモコレヲ繼續セルハ甚ダシク苦痛トセシ所ナリ。

今日マデノ發射彈數ハ約三〇萬發ト推定セラレ水際陣地、主陣地ヲ初メ陣地施設ハ主トシテコレニヨリ潰滅ス。」

栗林中将は水際戦法を捨てたのです。それでも海軍部隊なんかはトーチカをずいぶん作っていましたから、水際にもある程度兵力は配置してしました。しかし、これは艦砲射撃が何かでやられるとひとたまりもない。私は硫黄島に行った時にびっくりしたんですが、崖の縁に、破壊されたトーチカの巨大なコンクリートのかたまりが本当に転がり落ちるような格好で乗っかっているんです。艦砲射撃で吹っ飛ばされて崖の上にそのまま乗っかっているわけです。水際陣地なんて作っていても何の役にも立たなかつたでしょう。陸軍のそれまでの戦法は水際で敵を迎えるやり方で、一生懸命水際の陣地を作っていた。それに対して栗林は水際陣地を捨て、従来とはまったく違う地下に潜る戦法を主張したのですが、抵抗する勢力が随分あつて、相当苦勞して、半年位かけてやっと意思統一をしたという状況だつたようです。

続けて読みます。

「敵ノ制空權ハ絶對カツ徹底的ニシテ一日延ベ一、六〇〇機ニ達セシコトアリ。未明ヨリ薄暮マデ實ニ一瞬ノ隙ナク二三〇及至一〇〇餘リノ戰闘機在空中、執拗ナル機銃掃射力爆撃ヲ加ヘ、ワガ晝間戰闘行動ヲ封殺スルノミナラズ敵ハソノ掩護下ニ不死身ニ近キ戰車ヲ骨幹トシ、配備ノ手薄ナル點ニ傍若無人ニ滲透シ來リ、ワレヲシテ殆ド對策ナカラシメ、カクシテワガ火砲、重火器コトゴトク破壊セラレ、小銃オヨビ手榴彈ヲ以テ絶對有利ナル物量ヲ相手ニ逐次困難ナル戰闘ヲ交ヘザルヲ得ザル狀況トナレリ。以上コレマデノ戰訓等ニテハ到底想像モ及バザル戰闘ノ生地獄的ナルヲ以テ、泣キ言ト思ハルルモ願ミズ敢エテ報告ス。」

私の連載を読んでくれた同僚がよく言っていたのですが、栗林という人は本当にいい文章を書いていて、電報とか論文とか見ても見事なものです。ボキャブラリーも多いし。正に達意の文で生き地獄としての硫黄島の様子を描いています。この最後に、「泣キ言ト思ハルルモ云々とありますが、当時アメリカの実力といえますか、アメリカの客観的現実についてこれをあがままに語ると、泣き言を言うなと批判される風潮があつたものと思われ

ます。言うならば精神で、気力でカバーしろというようなことが言われたんだろ

うと思いません。しかし、栗林中将は硫黄島に来て初めてアメリカの実力を知つたわけではなくて、ずっと前から知つていて、だからアメリカと戦争したらダメだよという続けていました。その人がここに来てシャーマン戦車の傍若無人なる迫力に直面する。さぞ、無念だつたらうと思えます。

この戦訓を栗林は暗い地下壕の中で書き乍ら(私も兵団司令部の地下壕に入つたことがありますけれども)、あそこで何を思っていたらうか。知が力として生かされなかつたことへの無念の思い、激しい怒りを押し殺しながらこれを書いていたのではないらうか。「泣キ言ト思ワレルモ願ミズ敢エテ報告ス」というこの一言に、栗林中将のそういう思いが込められていると私は思っています。

本分を輕視

帝国陸軍の弱点のもう一つについてですが、軍人が軍人としての本来の任務というものを自覚していなかつたんじゃないかというふうな印象が非常に強い。つまり軍人たるものは何を一番大事に考えるべきなのか、その自覚がどうも列強の軍人などと比べると希薄だつたんじゃないかということでもあります。

一方、栗林中将の指揮ぶりを見ますと、硫黄島戦というのは制海權も制空權も補給線も全部失つたというまこと